

COSMOS集



「あすなる集」特選

あおい紙くろい紙

中村 恵*鳥取

「当院は現金のみとなつています」今日も一万一千円消ゆ
あおい紙一葉くろい紙一葉散りゆくそれで子が買えるなら
来年度保険適用するとうその一年を待てぬ卵巣

どうしたら授かりやすくなりますか「楽しいことを」とカウンスラー説く
子と紙を秤にかける馬鹿なわれ墓の草引く卵巣は空かち

寡黙な会話

伊藤 祐 楓*茨城

波をうつ華奢なからだを抱くときバレエは最も寡黙な会話
ダンサーの指先までがつま先で身体はまさにへゆがんだ真珠
目に見えぬものすら美しき白鳥の伏し目がちなる視線は踊る
感情の波大きな晩冬は姉が欲した互いに黙して

レコードの針下ろすときのプツというかそけき音は時間のコマ

万年筆

新屋 希子 熊本

パーカーの万年筆でさりさりと署名してゐる年下のひと

草 笛 工藤 亜希子*東京

せわしない心おさめて葉桜の季節自由は時に寂しく
かぎろいの風吹く丘に残されて風の声聴く一人の春は
こめかみの静かな記憶 草笛を鳴らした春のさみしいころ
さみどりの草そよがせて春風が耳元過ぎるフルートの音
樹の内をめぐる樹液の楽しいげな声聞こえしかもうすぐはつなつ

傷 前中 映 東京

自販機をあかりに頬を近づけてほのかな暖を取る冬の夜
見ることのできない部位にある傷を冬の光にあたためてをり
眠剤がとろとろ効いてくるまでの真闇の中の心臓の音
納谷幸喜大鵬幸喜またの名をイヴァン・ポリシコ樺太生まれ
昨夜の夢の話を言ひながらふたりで飲んでゐるはとむぎ茶きよのよ

春 は 関 石田 信夫*鳥取

〈大丈夫生きていけるよ〉山寺の掲示板にありしばし佇む
昏睡の父が「あつあつ」と返事せり「また来るけえな」と声掛けたれば
菜園に白菜大根捨てられて鬆が入り臺立つ春は関
照明を消し忘れたと居間に行き春の盛りの斜暈に出会えり
犬糧に曳かれるように老人は四匹の犬と自転車を繰る

雑草退治 間城佐代高知

久々に庭と向き合ふ日曜日まづは雑草退治と決める
時間さへあれば草引きせし母を草引きしつと思ふこのごろ
一週間に摘みたるパンジーの花柄早も片手に溢る
カタバミの細き根つこのその先に付きたる芋のしぶとき命
タブレットの本のページを捲りゆく人差し指の静かな時間

くぐもるような 末光 奈緒子*神奈川

オーク材の木目うつすら蓄音機は屋根裏部屋で齢重ねる
蓄音機のラッパに顔をすり寄せて何を思うか犬の「ニッパ」
ラッパからご主人様の声を聞きフォックステリアは首を傾げる
紫の煙たなびく喫茶店くぐもるようなアナログのジャズ
改札の傍に在りたる伝言板チョークで書いた名前かすれて

コロナ禍の桜 永井 八重子*岐阜

あと一首締め切り迫るその朝にウグイス鳴きて三首が浮かぶ
ジャガイモの芽が次々と顔を出す百パーセントの発芽率かな
満開の桜はコロナ禍の中で今年も咲いた枝の先まで
風に舞いさくら花びら惜しまれて長良の川を気ままに流る
田舎では密になるなど言われても人には会わぬ散歩しても

わが住む奈良 川村 秀子*奈良

頂上のデッキの上から見る奈良はやはり盆地だわが住む奈良よ
覆いし黄砂は消えてひんがしに若草山見ゆ大仏殿見ゆ
ま南に二上山がよく見えて大津皇子が浮かびくる春

大阪と奈良とを結ぶ亀の瀬の谷が狭まり列車が走る

ツインビル、アベノハルカス突出す大阪平野は都会そのもの

夫作るカレー 池内 祥子*愛媛

山道で知らない人と筈の不作を話す春は蘭
小綬鶏に鶯の声聞こえきて我の五感は今開となる
麦の穂が出揃う畑の彼方には春の空突く石鏡見える
枝を寄せりんごの花の香を利けばほんのり甘いバラの香がする
夫作るカレーは砂糖、バター入り味の決め手はその日の心

翻訳機 大宅 朋子 佐賀

リモートの画面に映るわが顔を母は撫でると介護士は言ふ
ドラえもんの世界でありし翻訳機五十年経て身近になりぬ
正月に行けぬと言へば甥つ子は「お年玉は」とあけすけに言ふ
レンギョウを切つてトイレに飾りたり早くこいよと春呼ぶ心
悪しきこと許さぬやうな稲光り闇のすみずみ浮き上らせる

大屋根 井上 啓子 愛知

屋根は飛び部屋から星が見えたこと夫は語り伊勢湾台風
立て替へて六十一年経し家の重き瓦は舅の自慢
重すぎる瓦の恐怖 耐震に軽き瓦と葺き替へ決める
屋根職人の一人は技能実習生片言なれどくるくる働く
大屋根に立ちてふうつと息を吐く眼下に青く揺るる葉桜

夫は知らない 山口 清子 群馬

しあはせは探すものではないからに草とり花の種をまきをし

買物のついでにと寄る本屋ありひととき現^{うつ}をわするるところ
あたためてまた温めてふかみゆく南瓜のうまさ夫は知らない
負のころもてあましてつと犬と行く畑道にわわつとたんぽぽ咲けり
寝ころびて電線の上の鳥をみる　こんなものかとおもふ我が生

祖父の一生　中居久子*岩手

理想郷めざしし祖父の入植地羊蹄山の麓たずね来
襲いくる自然災害と苦闘せし祖父の血流るるこの身いとおし
馬鈴薯のみどりがうねる開墾地羊蹄山に朝日かがやく
収穫せし馬鈴薯の澱粉出荷する馬車よ嘶き遠く聞こゆる
澄みわたる北の大地の満月に祖父の一生照らされており

光の中の音符　岩田房子*徳島

豆の花飛び立つ紋白はたはたと光の中の音符となれり
たんぽぽは荒れ田に一面ぽぽぽと兎の餌を摘みし日遙か
墓石に土をとらえてむらさきの祈る姿のたちつぼ蓮
店先の「さちのか」という苺購う娘が焼くケーキ思いつつ買う
未熟児の吾が飲みし乳やぎの乳八十路飲みます土佐の山羊乳

この世の傘　印出美由紀　神奈川

午前五時四十五分の直角が見ゆクロノスの腰掛けとして
夜明け前エアーズロックを思はせて毛布を被る夫の鉞脈
春キャベツ剥いては食べて十日目の芯にあまたの花が咲いてる
ふかぶかと昼の空あり犬四手の新芽がそよぐ撥るやうに
苔まとひちつと佇む木よヒトがコロナとともにながらふる日よ
亡きひとの息子家族が雨の中この世の傘をささずには帰る

梶井泉社　小林仁序　長野

住みびとの淨財もちて建てかはり梶井泉社尊かるべし
榎、櫻樹齡はおよそ十余年浦井、社とともに伝へて
神橋のたもとに美味き水湧きて朝な夕なに汲む人たえず
古文書の延喜式外神帖にその名を残す梶井泉社
神橋を十歩わたりて遷宮の梶井泉社おごそかに坐す

雪消え　宮沢民子　新潟

雪の日に咲きぬし桜の葉はしげり日差ししなかにさわさわゆるる
雪囲ひ解かれて庭はひろびろと水仙の芽が青々ひかる
雪消えの庭のすみには枯れ草をもたげて一人静は芽ぐむ
川沿ひの桜並木は三分咲き珈琲店の窓よりながむ
老木の桜の枝のあはひより飛行機雲のほどけゆく見ゆ

アオザイのよしえさん　佐藤咲子　兵庫

よしえさんの過去は未知なりマスク越しに日本の言葉らくらく話す
アオザイの姿あでやかよしえさん日本の文字を美しく書く
アオザイをすたり着こなすよしえさんふるさと遠くかなしからんや
折紙を器用に折れるよしえさんほらチュウリップひよこがはねる
目に涙あふれさうなりよしえさん稽古をはりて紅茶の時間

五年日記　森下たみ*埼玉

マスクしてお習字する子等こんな日が笑い話となる日はよ来よ
昨日の鍋の残りに御飯入れ雑炊つくる春寒の朝
もつかなと思ひて買ひし五年日記四年目となりまだまだいけそう

ペットロスにも似て夫の廃車せし後の無聊を見て見ぬふりする
九十二の夫と二人の生活は余白のようだ好きに生きよう

迷惑電話 宮地 正志 香川

われの死が遠くの友に広がりぬ桜咲く日に誤伝訂正

ベルが鳴りいそぎで付くる補聴器に不用不急の迷惑電話

ストレスとリラククスとを併せ持つ作歌をすれば風立ち渡る

耕作を放棄されたる山畑に一群咲きて菜の花明かし

新緑の色は各々異なりぬ空に向かひて競ひ伸びゆく

グリーンジャケット 地庵 道子 和歌山

主治医より退院許可の告げられて待つ人居らぬも帰る嬉しさ



「その二集」特選

合わせて歩く 松井 奏*茨城

スーパーで買ったピンクのトロマガゴ部屋のライトで油が光る

雨上がりに静かなタイヤの音がする午前3時の高速道路

水槽の中の水草ぶくぶくとリズム刻んで泡を出して

一年生手提げバッグを引きずってニコニコ笑って学校に行く

ゆっくりとトコトコ歩く五歳児の進む速さに合わせて歩く

あかあかと霧島つつじの咲き盛り朝の陽射しに輝いてをり

コロナ禍の制限あるも球児等の若さみなざる姿うつくし

着古した着物の如く歳老いてあちらこちらの綻びてゆく

マスターズ松山英樹の優勝のグリーンジャケット姿のまぶし

ありふれた日 水辺 あお 静岡

たんぽぽといふありふれた花が咲くありふれた日の畦の夕映え

人災であつてもなくてもカタツムリ被災の森に生きていくのみ

なめくぢになるのが怖く僕たちは重き貝殻背負ひつつ生く

こもりつつ日々弾きをればわが小指黒鍵めざしなやかに伸ぶ

忘れたる友のあだ名を思ひ出す人と諍ふ夢のなかにて

通勤と旅の違いを思ひつつ年度はじめの改札通る

絶交の日 工藤 玲 音*岩手

豚ばらが地層に見える夕暮れも大鍋に入れ煮込んでしまふ

文化祭前夜にも似る残業を終えてひらたい生牡蠣を吸う

耳鳴りのなかに遠くの国がありその丘の木に実るオレンジ

ドーナツのもくつと折れる手ごたえが絶交の日と似ている昼間

爆ぜること知りつつそれを待っているポップコーンの豆のあかるさ

毛羽立ち 高橋 梨穂子*新 湯

澄みきつた空に一番星ひかり標本木につぼみ生まれる
春過ぎて紫陽花わさわさ咲く頃もわたしはちゃんとわたしだろうか
頭痛薬の効かない深夜ちくちくと毛布の毛羽立ちばかり気になる
自動ドアひらけばまばゆいコンビニにこんなにくさんのひとりぼっち
センバツをラジオで聴けばカタカナで表現されるユニフォームの色

短歌のリズム 秋山 幸子 千葉

袖子の木を見てゐる母の小さな背指折り動く短歌のリズム
さみしいと微かにきこゆる母の声泣きたくなるをぐつとこらへる
顔も知らぬ母の友より届きたる便りに母に代はり涙す
亡き母に代はりて文を認める母なら伝へん言葉さがして
大輪のばらをいただき手向けると微笑みましぬイラストの母
出雲には黄泉の入口あるといふ母に会ふため訪はんと思ふ

半眼とろり 小野 久美子*兵庫

プレゼントのピンクのリボンほどく時のわくわく感を結んでいます
ばらの花頭に乗せてカピバラの温泉タイム半眼とろり
目が合ひしひつじもこもこ2頭来る続3頭あと群れで来る
もういいかいぐらぐらゆがく筈に竹くしを刺すうんもういいよ
決めかねる事持ちながら帰る道いちじく入りのバゲットを買う
買われゆく山の中腹分譲地は新コミュニティの生まれる所

瀑布のひとつづ 尾花 照子*福岡

福岡駅北階段を降りいく春の瀑布のひとつづとして

飛魚の上げるしぶきの煌めきてひととき地球の衛星となる
雨あとの山路たどれば瀬高蜷蝶の三ツ藤巴のように寄せる
いまの世に心のありて片隅の土偶は土に還ることなし
くちばしを花で濡らした鶉のごとありたし黄泉戸喫ののちも

二年 D 組 高橋 みどり*愛知

「高野公彦―みづきの歌が好きです」と告げし少女の欠席続く
引き受けてしまえば二度と担任に戻れぬ人事を示されている
人生の最後に担任した組が君らでよかつた 二年D組
「主任」とう慣れない役を引き受けて退職までの二年が埋まる
花ばなの後を唇が追いかけるごとくに四月九日の藤

蒲原 平野 林 やえこ*新潟

だいらせん せつ
大力山の雪庇の上にはぼつそりと残るキツネの足跡たどる
初めての家族ラインを終えし夜 夫のいびきの響きけるかな
密やかに冬枯れの野に慈雨おちる三月三日の蒲原平野
蒲原の畑に残る青首の大根ぼつんと陽を受けており
河わたる風を翼に包み込みトンビふわりと欄干越える

桜ごはん 三村 幸子 兵庫

静けさは能楽堂に描かれた大きな松のアシンメトリー
しばらくをほぼづゑで待つやはらかに桜ごはんが炊き上がるまで
ペリカンの万年筆の書きごち確かめるかに卒業と記す
やはらかな汽笛を聴けば坂道にサリーの女とすれ違ふ街
悲しみのおほよそ消えた日曜日部屋のサポテンに水をやりたり

あの子の雨

荒川 ゆみ子 東京

ひな飾り仕舞ひし後に緋の色が恋しくなりてグロサリオ置く
ひな人形飾つてあつた壁のなか異空の階段あるかもしれぬ
ガーベラに落ちた雨粒見えたからわたしひとり傘ひらく道
手を伸ばし雨の終はりを空に訊く樹木のやうに息をしづめて
傘を閉ち駆け出してゆくランドセル あの子の雨はあがつたらしい

白いたんぽぽ

川越 三紀子*宮崎

枯草を力任せに引つ張れば土の中から新芽が覗く
起きぬけにもしかしたらと来てみれば一輪開いた白いたんぽぽ
北の国へ帰りにゆけるジョウビタキおとついでに我に別れを告げて
ハンガーの我が脱け殻の洋服を過去もろともに袋に詰める
会いし人のことばひとつに胸かげり黙々として芝桜植う

ちぎり絵

梶 薫子 鳥取

突然の転勤引つ越しせはしなくさびしく思ふ間なく過ぎゆく
「おばあちゃん遊べれないね」児に言はれああ遊ばれてゐた日々なのか



「またねー」こちぎれむばかり手を振り車尾灯見えなくなるまで
この胸の八割占めた児の居場所ほつきり空いて春の雨ふる
ひとつづつ剝がして拭いて児のオート亀のちぎり絵捨てられずるる

生へ際

石本 洋子 佐賀

邪魔にまでならねばいまだ棄てもせず此が残せし裁縫箱を
古希を過ぎわれの白髪を生へ際は此をつくりと鏡に見入る
この路を右へ折れば十余年此を預けしホームへ続く
性格の違ひか夫は小さき草われは大草取り合ひてをり
一人居の真昼テレビの音量を上げてシンクの食器を洗ふ

ふるさとの町

藤田 邦彦*東京

五、六筋の雪残る富士五月晴れ甲府盆地に田植え始まる
珍しく田んぼに多く人がでて今日は日曜 田植え始まる
風に乗り子ども声も聞こえる田植え機の音しばし止むとき
畔によるメダカの群れはばつと散り知らぬ顔してまた寄っている
建物の途切れるところ田んぼから蛙の声するふるさとの町

猫の背

樺 かな 広島

ひと雨ごとひよいと何かが芽吹き初め春は不可欠な手品師である
昔のこと知らぬ存ぜぬと言ひたげな広島駅前ビル建ち並ぶ
騒音も夢のまた夢白線の引かれて新しき駐車場あり
其処ここに人の面影たたすやう泰山木の花が開きぬ
どのやうに生きればいいのか猫の背が問うてゐるなり身動きもせで